

第二章 分業が生じる原理

分業は多くの利点をもたらすが、社会全体の富の増大を見越して意図的に設計されたものではない。むしろ、取引や物々交換など、品物を品物と取り替えるという人間の自然な傾向が、必然的に、ただしきわめて緩やかに進んで生み出した結果である。

この傾向が生得的原理なのか、理性と言語の必然的帰結なのかは本書の論点ではない。重要なのは、これが人間に普遍的で、契約を理解しない動物には見られないことだ。たとえば二頭の猟犬が同じ野兎を追い、互いに獲物を回し合うように見えることがあるが、それは契約の結果ではなく、その瞬間に同じ対象へ衝動が偶然一致したにすぎない。⁽¹⁾ 熟慮のうえで骨と骨を公平に取り替える犬はいないし、「これは私の、あれはあなたの。これとあれを替えよう」と身ぶりや鳴き声で伝える動物もない。動物が何かを得たいときの唯一の手段は、求める相手に取り入ることだ。子犬は母に甘え、スパニエルは食卓の主人に愛想を振りまいて注意を引く。人間も、ほかに手立てがないときは卑屈に媚びることがあるが、いつもそれに頼るわけにはいかない。文明社会の人は多くの人の協力を常に必要とする一方で、生涯に得られる深い友情はごくわずかからである。多く

の動物は成長すれば自然のままで自立するが、人間はほとんど絶えず同胞の助けを要し、純粹な博愛に期待しても空しい。相手の自利に働きかけ、こちらの要求が相手の利益にもなると示すほうがはるかにうまくいく。あらゆる取引の申し出はつねにこう要約できる——あなたの欲しいものを私に、代わりにあなたが欲しいものを差し上げよう。私たちが受ける厚意の大半はこうして得られ、夕食が用意できるのも、肉屋・醸造家・パン屋の慈善ではなく、彼らの自利への配慮のおかげだ。私たちは人情ではなく自利に訴え、自分の困窮ではなく彼らの利得を語る。市民の善意に主として頼れるのは物乞いくらいだが、彼でさえそれだけでは生きられない。施しが暮らしの元手になるとしても、それは必要のたびに必要な形で必需を供給してはくれない。彼の臨時の必要の多くは、他の人と同じように、約束や交換や購入で満たされる。もらった金で食べ物を買ひ、恵まれた古着は自分に合う衣服や宿代、食べ物、あるいは金に換え、その金でまた衣食住を調達するのである。

私たちは互いに必要な助けの多くを、約束や物々交換、購入で得ている。分業の出発点も、この取り引きへの傾向にある。狩猟や牧畜の部族では、ある者が誰よりも弓矢作りがうまく、それを牛や鹿の肉と頻繁に交換し、やがて自分で狩るより多く得られると

知って、利益にかなう判断として弓矢作りを本業にし、いわば武具職人になる。別の者は小屋や移動住居の骨組みや覆いを作るのが得意で、その働きが近隣の役に立ち、肉を報酬にもらううちに、この稼ぎに専念するのが得だと考えて大工のような者になる。同じ道筋で、三人目は鍛冶や銅細工の職人に、四人目は皮なめしや革仕上げの職人になる——当時の言い回しで「野蛮人」の衣服の主要部分を成す素材を作る仕事である。こうして、自分の労働の余剰を他人の産物と確実に交換できるという見込みが、人を特定の職に向かわせ、その結果、適性と技能が育ち、磨かれていく。

人の生まれつきの才能差は、私たちが思うほど大きくない。成人して職業が分かれた後に見える「まったく異なる才能」は、分業の原因というより多くはその結果である。たとえば哲学者と街の荷運び人の差でさえ、自然の違いよりも習慣・慣行・教育の違いに由来する。生まれてから六〇八年ほどは互いによく似ており、親や遊び仲間にもほとんど差は見えない。その頃から、またはほどなくして二人は全く別の稼業に就き、そこで差が意識され、次第に開いていき、やがて哲学者の自尊心はほとんど共通点を認めまいとするほどになる。だが、取引や物々交換への傾向がなければ、誰もが望む生活の必需品や便利なものを自前で調達しなければならず、皆が同じような役割と仕事を担うこ

とになって、著しい才能差を生むほどの職業の違いは生まれなかったはずだ。

この性向は、異なる職業のあいだに顕著な才能差を生み出すと同時に、その差を社会の役に立つものにも変える。実際、同一種とみなされる多くの動物では、自然の資質の違いのほうが、人間で習慣や教育が働く前に見られる違いよりはるかに大きい。生来の才能や気質で言えば、哲学者と街の荷運び人の差は、マステイフとグレイハウンド、グレイハウンドとスパニエル、スパニエルと牧羊犬の差ほど大きくない。それでもこうした動物は互いにほとんど役に立たず、マステイフの力はグレイハウンドの俊敏さやスパニエルの利発さ、牧羊犬の従順さから少しも助けを得ない。取引や交換の能力も志向もないため、各自の才や技の産物は共同の蓄えに集約されず、種全体の暮らし向上にも結びつかない。結局、各個体はばらばらに自活して身を守るほかに、仲間の多様な才能から利益を得ない。他方、人間では、最も不似合いに見える才能どうしが相互に有益であり、各人の才能の産物は取引や物々交換への普遍的傾向によっていわば共同の蓄えに持ち寄られ、誰もが必要に応じて他者の産物の一部を手に行ける。

注

(1) スミスの時代の知見とは異なり、現在の研究では一部の動物や昆虫で協調的行動が広く確認されている。たとえば、オオカミの群れやアリのコロニーである。